

優秀賞
ゆうしゅうしょう

中学生区分
ちゅうがくせいぶん

すべての人が幸せな未来を目指して
すべてのひとがしあわせなみらいをめざして

豊見城市立豊見城中学校
とみぐすくしりつとみぐすくちゅうがっこう
三年
さんねん

町田 芽吹
まちだ めぶき

だと思おう。
おも

私には、ダウン症候群という障がいをもったおじさんがい
わたし しょうこうぐん しょう

た。おじさんは、喋ったり、自分で真っ直ぐ歩いたりすること
しゃべり じぶん ます ある

ができなかった。でも、自分の気持ちを笑ったりして表現する
じぶん きもち わら ひょうげん

ことはできた。おじさんは、私のおばあちゃんと一緒に暮らし
わたし おばあちゃん いっしょ

ていて、私が家に遊びに行くと、笑ったり、拍手をしたりして
わたし いえ あそび 笑い 拍手

迎えてくれた。そんなおじさんのことが私は好きだった。
むか わたし す

しかし、私は、おじさんと一緒に外に出掛けることがあまり
わたし いっしょ 外 出掛

好きではなかった。なぜなら、外に出掛けると必ず他の人から
す 外 出掛 かなら ほか ひと

目を向けられてしまうからだ。別に、悪口や非難の声をかけられ
め 目 向け 別 悪口 非難 声 かけ

るわけではなかったのだが、私はその視線が嫌いだった。ただ
わたし その 視線 嫌い

他の人と同じように外に出掛けて、楽しんでいるだけなのに、
ほか ひと おな そと 出掛 楽し

どうして視線を向けられないといけないのか、私には分からな
しせん 視線 向け できない いけないのか わたし 分

と違うということとは、そんなにもおかしいことなのだろうか。
ちが こと おかしい

そもそも、なにもかも自分と同じ人なんて存在しない。血の繋が
そもそも なにもかも 自分 一緒 人 存在 しない 血 繋が

っている家族でさえも、顔や性格が全く同じではないのに、血
家族 顔 性格 全く 一緒 ではない 血

の繋がっていない人と自分が同じであるわけがない。
つながっていない 人と 自分が 一緒 である わけ がない

私は、全ての人が同じ人間として、平等に幸せであるべき
わたし すべての ひと おな にんげん ひょうどう しあわせ

かった。でも、それはきつと、おじさんが障がい者だからだ。

周りの人は、おじさんを「普通」ではないと見ていたのだ。

私は、「普通」という言葉は存在しなくていいと思う。「あの人は普通じゃない。」などという言葉を耳にすることがあるが、

その「普通」とは何なのだろうか。他の人と違うということはだめなことなのだろうか。そう考えたとき、私は思った。他の人と違うということは悪いことではない。むしろ、他の人にはないものをもっているのは、とても素晴らしいことだと。そう考えるようになってから、私は、おじさんと出掛けることが好きになった。私に、このような考え方を見つけさせてくれたおじさんには、今も感謝している。

今よりも、他の人との違いや個性を認め合える人が増え、どんな人でも幸せに過ごすことができるあたたかい世界が、少し

ずつでも広がって行ってほしいと私は思う。そして、そんなあたたかい世界を広げるために、私は自分の体験を通して知った、人々との違いや個性の素晴らしさを周りの人に伝えていきたい。